

秘めたる蕾、啄むモノは……。

浸食 02

「そうじゃない、そうじゃないのよ。そこはもつとこう、なめらかに、流れるように」  
吹奏楽部顧問の横井和也はタクトを振る手を止め、縦笛の方を見る。

「えっとねえ、もつと大蛇川の流れのようになめらかにね。わかるかなあ。ふう、ふう、って感じがいいのよお。それを今の感じだと、ふう、ふう、って感じでスタックカートが効いちちゃってるの。ね？ ゆうつくりって感じで息をふいてみてえ」

普段はきびきびした教員なのだが、こと音楽が絡むとなぜかなよなよした、それでいて押し強い性格になる和也に吹奏楽部の子達は戸惑いを隠せない。

去年、一昨年と吹奏楽部を続けてきた葉山和人は慣れたもので頷いていたが、今年から始めた深見こずえは気後れしていた。

さらにイメーჯ先行の指導方法に首を傾げることが多く、大蛇川がどのと言われても今一つピンとこない。

本人としては苦手な音楽の授業の練習になればと思い参加したのだが、かえって混乱を強めてしまっていた。

「それじゃあ、最初から……。さんし……はい！」

タクトを振るう和也に合わせ、合奏が始まる。

「ぶ、ぶ、ぶびー！！」

けれど滑らかとは程遠い音を鳴らすこずえ。緊張のあまり息を深く吐いてしまった。

「わわわあ〜」

耳をふさいで悲鳴じみた高い声を出す和也に部員達も思わず目をつぶる。

その後、「瞬間を置いて静寂が訪れる中、問題の高音の子は真っ赤になって俯く。その様子に気付いた和也はどうしたものかと人差し指で唇を叩き、視線を彷徨わせる。

高音を出したのは深見こずえ。叱責するのは簡単だが、それで改善するかと言えば逆の話。彼女は初心者であり、まずは楽器に慣れてもらう必要がある……。が、こずえの場合、ややあがり症などころがあり、一つの失敗もともかく、自分が原因で合奏が止まったことを気にしていた。

この状況でくどくど言うことは必ず彼女にとってマイナスになる。咄嗟にそれを理解した和也だからこそ、どう言い訳を付けて彼女の羞恥心を誤魔化すべきかと悩んでしまう。

「うーん、そうねえ、少しこう、ゆっくりとした呼吸が必要かしら。みんな、かる〜く、しんこきゅうしてみようか。えっと、すー……はー……」

大きな身振りで深呼吸をする和也につられ、部員達もそれに倣う。

ひとまずのごまかしで高音の犯人の顔も熱を失いつつあるが、どう指導したものか考える。

「それじゃあ、ひとまずパート練習ね。Aパートから……」

良い案がそうそう思いつくはずもなく、和也は別パートの練習に逃げた……。

「うーん……」

アルトリコーダーを見て項垂れるこずえ。緊張からの高音ぶびーで合同練習を止めてしまった気負いがあり、テンションが下がっていた。

「こずえさん、あまり気負いせず、落ち着いて……」

落ち込む彼女の様子を察し、三組の御崎澄子が声をかける。彼女は普段囲碁将棋部に居るのだが、合奏の技術が買われてコンサートが近づくと和也に請われて合奏部の練習に加わる。そのコンサートというのも公民館で村人相手にそれらしいレクリエーションをする程度なのだが、合奏の形に拘る和也の信念が彼女の兼部を認めさせていた。

「ありがとう、御崎さん。こずえ、ちよつと緊張して……」

笑顔で頷くこずえだが、その表情に硬さが残る。

深見こずえは三組では幼さの残る小さい子で妹分。疑うということが苦手なのか騙されやすく、仮に騙されてもくすくす笑って許してしまう子。そのせいか可愛がられることが多く、被保護欲を持たれることもある。

普段、クラスメートに気遣いすることのない澄子だが、真っ赤になったこずえのことは気になるらしく、声をかけていた。

「ふふ、こずえさん、真っ赤になってリンゴみたいでしたから……。いいですか、こうやってふうと軽く息を出して……」

からかいつつやり方を教える澄子にこずえは馬鹿正直に教えを受ける。

〜♪

落ち着いた状態なら難なくこなすこずえだけれど、いざ合奏となると緊張してしまい、高音を奏でてしまう。

「うーん……」

その様子に澄子も腕組みしてしまい、ため息交じり。

「こずえちゃん、大丈夫？」

パート練習を終えた葉山和人がやってきて声をかける。同じ二組ということもあり、馴染みのある和人は遠慮なくこずえに声をかける。

クラスでも背が高く、物腰穏やかかつ、気が利く彼は女子からの人気が高かった。

「あ、かずくん、えとね、こずえ、指使いがちよつと苦手でえ……」

同い年なのに妹扱いなこずえは遠慮なく和人に甘えた感じで頷く。もともと甘えん坊なところのあるこずえの一人称は名前。人によっては冷笑しかねないが、和人は気にせず笛の扱い方を教えていた。

「ここはこうして、こうするんだ。そして、息を拭くときはふーって長くゆっくり。そう、そんな感じ」

笑顔を交えて教えてくれる和人にこずえは笑顔になる。

「へえ、さすが葉山君。教え方も上手ですね」

感心した様子で言う澄子にこずえは自分のことのように笑顔で言う。

「うん。かずくんは教えるのすごいんだよ！ こずえ、かずくんのおかげで理科の補習もちゃんと合格できたし！」

「うふふ、それはすごいですね」

澄子の感心したことはこずえの扱い方。そんな彼女の心中などこずえが察するはずもなく、笑顔で受け流していた。

「はい、それじゃあ今度は笛の番ね。いい？ ゆうゆうくり呼吸するのよ。穏やかに、蛇川のように……」

和也のアドバイスだが、いざとなると緊張したこずえには……。

十

「はあ……」

クラブが終わると、教室にはため息混じりに帰りの支度をしているこずえが居た。

和人との練習の間は落ちてきてきたのだが、合奏となるとパート練習ですら緊張してしまい、結局高音にて練習を邪魔してしまったのだ。

和也は苦笑いでフォローをしてくれたが、当のこずえはすっかり消沈してしまいうなだれている。

そんな彼女に和人も声をかけづらく、頭を掻いて言葉を選んでいた。

「ああ、えと、その、こずえちゃん、あんまり気に病まないでさ……。その、練習は失敗がつきものだし、それを克服して次につなげるつもりで……」

「でも、こずえ、ずっと失敗続きだし……、皆の練習の足引っ張って……」

「それは、その……」

個々の練習ならば問題ないのだが、こと全体練習となると恥ずかしがって失敗してしまうこずえ。どうしたものかと和人も言葉が見当たらない。

「お、なんだ？ 深見の奴、また葉山にだだこねてるぜ」

教室でもたもたしているとクラスメートの常盤祐樹がやって来る。チビで太り気味な佑樹はいじめっ子気質。高杉徹が居ないとすぐに弱いモノイジメを始める。

和人は彼よりずっと背が高いのだが、物腰穏やかで乱暴な反撃をしてこないことを知っていることもあり、イジメに躊躇が無い。

「だだなんてこねてないの……。こずえはちょっと……その……」

「くく、なにがこずえだよ。おまえ自分のこと名前で呼んで恥ずかしくないのか？ はは、がきだな、お前」

普段バカにされることの多い佑樹は攻撃できる対象を見つげるととめどが無い。遠慮なく

罵倒を始め、着替えていた。

「そんな言い方は良くないよ」

珍しく和人が言い返そうとすると驚いたのか佑樹はびくりと着替えの手を止める。体格的には和人に敵うはずもなく、普段の雑用、及び重い楽器の持ち運びもしている和人相手には分が悪く、佑樹はあせあせと言葉を選ぶ。

「そ、そんなに怒るなよ。っていうかさ、どうせあれだろ？ また深見の上がり癖だろ？ そんなん気にするのがだめなんだよ。普段から恥ずかしいってことに慣れてないからだめなんだ」

適当な言葉を見つろって繋げる佑樹に和人は厳しい視線を緩めない。だが、こずえは思うところがあるのか、うんうんと頷いている。そういう素直なところがイタズラされるところであり、また、庇護欲を駆り立てるものでもあった。

「だからさ、たまに、恥ずかしい事に慣れておけばいいんだよ」

「？ 慣れるの？ どうやって？」

適当に言ったつもりがこずえは食いついてしまい、佑樹も捨て置けずしばし考える。

「だからさ、その、えと……まあ、任せておけて」

彼女の顔、そして隙のある胸元を見て何か思いついたのか、佑樹は胸をどんとたたいて頷く。

「うん。ありがと、常盤君！」

「お、おう……うん」

笑顔で言い切るこずえに佑樹は下心の隠し処を探して目をきよろきよろさせていた。

新デザインの水着の当選者が発表された。

水着を希望する女子は多かったけれど、撮影込みとなると尻込みする子が多く、女子の希望者の抽選は行われなかった。

逆に男子の方は希望者が多く、抽選結果に悲喜こもごも……。

「……」

抽選にあぶれた昭利は険しい表情で俯いていた。

「あーあ……、せっかく皆の水着姿みれるとおもったのになあ」

同じくあぶれた雄太はのんきな声で言う。意外とスケベな彼のことからきつと悔しがると思っていたが、そうでもないらしい。

「なんだ、昭利も落ちたの？　ってか、お前もむっつりスケベだな」

「ちげーよ……そんなんじゃねーし」

昭利はだまりこくってそれ以上話に乗って来ない。

水着のモニターの撮影には男子も参加すること。つまり、自分が参加すれば一人、明日香の水着姿を見る奴を減らせるわけだ。

といってもモニター撮影後も水着は明日香の手元にあるわけだから、どのみち水着姿は披露される。だが、もし、プール開きまでに彼女を説得できたなら？　その為にも参加して明日香に考えなおすよう、話す機会を持ちたかった。

しかし、結果は落選。別の方法を考えなければと思考を巡らせる。

「よーし、新デザイン水着もらえるぜ。いーだろー！　へへへ」

そんな中、抽選を受かった緒方大輔はガッツポーズで水着を掲げていた。

「うっせーな、たかが水着もらったぐらいで喜ぶなよ、貧乏人」

そんな彼に吉岡雄二がちやちやを入れる。お互い村では知られたところの子息であり、貧乏とは程遠い。

「へへ、羨ましいんだろ。俺は一足先に女子の水着姿見れるかんなく」

下心を隠す素振りもなく言い張る大輔はクラスでの人気も低い。当の本人は悪ふざけをする自分が皆からお調子者と受け入れられていると勘違いしているところもあり、まだ当分直る見込みも直すこともない。

「悪いな、中村。俺は先に明日香ちゃんの水着姿見てくつからさ。お前は妄想してしこつてろよ」

クラスでも大輔と昭利は不仲であり、何かと煽りに来る。

「くっ……何が言いたいんだよ。明日香の水着なんて別に……」

「とかなんとか言っておいて、お前もそれ目当てでモニターに応募したんだろ？　知ってるんだぞ？　はは。ご愁傷さま。お前じゃモデルに向いてないってこったな。だってチビだもんなく」

「緒方君、そんなに煽るなよ。昭利も抑えて……」

いつになく煽りに来る大輔に雄太はいつ昭利が切れるかとおろおろする。

「へ、こんな腰抜けの出歯亀が切れたって怖かねーよ」

「んだと、この野郎！」

「お、おい……昭利……わわわ……先生……」

立ち上がり、今にもぶつかりかねない距離の二人。雄太は担任の隆の方を見るが、彼は気にせず教室を出て行ってしまふ。

「ちょ……せんせ……」

雄太は追いかけてようとすが、それよりも先に昭利が大輔の胸倉を掴む。

「お、やる気かよ。腰抜けピーピングトム君」

「取り消せ！」

「何をだよ。実際そうだろう？ 女子の水着姿見たいからモニター応募して、ダメだから怒ってさ！ このスケベ野郎が」

「お前だろうが！」

胸倉を掴む手を捻り、締め上げる。大輔がそれを大人しく受けるはずもなく、昭利の頭をおさえ込む。

「チビが……。生意気なんだよ！」

「取り消せ、この野郎！」

背丈の分だけアドバンテージがある大輔だが、チビながらに身体は鍛えられている昭利だと拮抗してしまう。

徐々に冗談ですまない顔になり、力みで顔が赤くなり始める。

「ちよっと昭利、やめなさいよ……。大輔も……」

周囲が激突の予感に遠巻きになるのに反し、明日香が二人に止めの声をかける。

「こいつが先にちよっかい出して来たんだ。明日香が口を挟む問題じゃないだろ」

「だって、昭利……」

「俺はどっちでもいいぜ。昭利が喧嘩したいってんなら買うし」

「てめえ！」

「やめなさいよ！ 昭利！」

今にも殴りかかろうとしたところで明日香が絶叫にも近い声を上げた。さすがの昭利も驚きを隠せず、手を止める。だが、大輔は気にせず、呆気に取られている横顔を叩く。

「っ！ ってえ……」

突き飛ばされる格好の昭利。大輔は拳を握っていない。

「てめえ！ 卑怯だぞ！」

「やめろよ、昭利……」

担任も居ない中、広樹と雄太が慌てて彼を止めに入る。ただ、スポーツマンの昭利に比べて非力な二人は引きずられる格好で止めることができない。

「おいおい、俺はただ殴られたくないから手突っ張っただけだぞ？ お前が殴ろうとし

たじゃん。なあ、皆」

周囲に向かって潔白を尋ねる大輔。周りにはどちらにも関わりたくないようだけれど、この件に関しては昭利に分が悪い。昭利は拳を握っており、大輔は握ってこそ居なかったから。

「ふざけんな！ そんな言い訳！」

「やめなさいよ、昭利、みつともない……。あんたが手を出すからでしょ。ただ大輔君の手がぶつかっただけじゃない。あんたも悪いんだから、いい薬よ」

「なっ……明日香……!?!？」

頭に登っていた血がさーっと下がる。なぜ大輔を明日香が庇うのか？ いくら自分が手を出そうとしたとはいえ、結果的に自分は殴られ損……。しかも明日香は彼を庇い……。

「……なんだよ、なんでそんな奴庇うんだよ……」

「庇うって……あたしは別にそんなつもり……。とにかく話を逸らさないでよ。喧嘩なんてださいんだし、やめなさいよ」

「……」

明日香の言うことはもつとも。ここで大輔を殴ったところで憂さが晴れるわけでもない。問題はそれよりも明日香の水着の件。そのこともこの喧嘩で見通しが暗くなる。

「俺は……」

がっくり肩から力が抜けると、それを察して雄太も広樹も手を離す。

「ん？ どうした？ おい、ビビッてんのか？ ちび」

「はっ……黙れ……」

明日香の背後から罵声を浴びせる大輔。その構図が見たくなく、昭利は背を向けて教室を出る。

「おい、昭利……」

廊下に出るなり走り出す。今からどこへ行くつもりなのか、自分でもわからない。とにかくくじっとしていると何をしでかすかわからないと、とにかく走った……。

「ふふ……だっせえの……。まじ嗤える……。んっ……」

休み時間、屋上で大輔は朝のことを思い出し、嗤っていた。

「……んちゅ……ちゅぽ……はむ……ちゅ……」

本来なら鍵がかかっていて入れないのだが、古くなつた戸を軽く上げると外れるようになっていた。大輔は最近になってそれを知つたと言つていた。

「アイツ、ほんとだっせーのな……。明日香ちゃんに怒られてしよげてたしさ……。つか、やっぱアイツやっぱり明日香ちゃんのこと好きなんだな。くっ……ふう……ああ、そこ、きおちいい……」

誰かが同じように鍵を外して上がって来られないよう、扉のノブを外側から縄で固定している。

「んちゅぽ……んう……ちゅっ……はあ……べろちゅ、べろべろ……ちゅ……はあはあ……んもう、授業始まつちゃうよ……。戻ろうよ」

そんな彼は壁に背を預け、ズボンのチャックを下ろし、そこからチンポを出していた。

「いいじゃん、明日香ちゃんも授業さぼろうよ。保健室行つたつて言えばいいよ……」

それより続けるよ……はあ……んう……」

そのチンポは細い指先に握られ、先っぽは明日香の口の中に含まれる。

ちゅっぽちゅっぽと音を立てて頭ごと前後する。

口の中に涎を溜め、圧を掛けられるように息を吸い、頬、舌を大輔のチンポに密着させる。先っぽからは我慢汁がじゅるつと出て、それが潤滑剤に変わつて口の中を前後していた。

「んちゅ、んちゅ、んちゅっぽ……んちゅ……っぽ……」

ぬちゅぬちゅと音を立てながら、時折喉を鳴らす明日香。一応、する前に濡らしたハンカチで拭いたけれど、大輔のチンポはおしっこというか男臭さがある。

生臭さとも汗とも違う鼻を突くつんとした臭いに咽る。

「んもう……くさいんだから……それに今日は撮影なんだよ。変な感じじゃ……」

「だからこそじゃん。もし俺が勃起してたら困るし、そうならないために明日香ちゃんに抜いてもらいたいんだろ」

「だって……んちゅ、ねちゅ……んぷふう……ちゅう、べろべろ……ちゅう……ん、やだ、また我慢汁……んごく……ごくっ……はあはあ……これ、喉に絡まるから嫌だもん……」

唇周りを粘液で汚しながら明日香が不満そうに言う。唇とチンポは粘液で結ばれており、太陽の角度できらりと光る。

喉を滑る大輔の欲望の粘液。それを唾液で飲み込み、胸がむかむかと熱くなる。

本当ならこんなことしたくない。昭利のこともそう。大輔のことなど庇いたくない。けれど、隆とこのことを知られては逆らう余地も無い。仕方なく大輔を庇い、今もこうしていらしたおちんちんを慰めている。

「んもう……はやく出してよね……チャイムなるよ……んちゅ……んちゅ、んちゅぽ……」

じゆるじゆる……」

ちゅっと口を窄めてチンポを強くしめあげる。口腔内の頬でぎゅっとチンポを絞め、めいっぱい刺激してあげる。どろっとして勢いよく我慢汁がびゅっと出るが、まだ射精には遠いらしい。

ぬるぬるする生臭い汁を嚙下しつつ、根元までチンポを啜え込む。

「んんぐ、んぐんぐ……ぐう……んぐ……ぬぶう……んう……ふはあ……」

苦しそうに呻きつつ、チンポをきゅっと締め上げる。するとようやくびくびくっとチンポが震えた。

「うっ……くう……はあはあ……明日香ちゃん、口の中に出すよ……飲んで……」

びゅびゅっと吐きだされるチンポ。喉の奥で受け止めることを拒み、吐きだそうとする。が、思いとどまる。精子が服については後の授業で困る。口の中でチンポを留まらせ、舌で精子を受ける。

温かさと青臭さ、苦味を受けつつ、鼻で「んうぐ」と苦しそうに呻く。

「んぐう……ごく……んっ……んふう……ごく……んちゅ……う……う……  
ああ……んえ……」

射精を終えたチンポをんべっと口から離し、思わずコンクリートの地面に精子を吐きだそうとする。

「だめだろ、明日香ちゃん。そんなところにザーメン出したら誰かが気付くっつての」

「んう……」

言われて確かにと頷く明日香。どこかに吐きだせる場所が無いかときよろきよろするけれど、特に見当たらない。このまま水場まで戻り、そこで吐きだそうかと考える。けれど、大輔はドアの前に立ち、通せんぼ。

「んう！ んっ、ん、んおんいえお……」

鼻だけで抗議するけれど言葉にはならない。

「だめだめ、ごくくんしろよ。明日香ちゃん、精子好きだろ？ いいじゃん」

口腔内のモノを飲まんとすると涎が溢れ始める。普段、どれだけ唾液がでているのかと変に關心する暇ではない。

「……！！」

すると鼻を抓まれる。唯一呼吸ができる部分を閉ざされ、どんどん苦しくんる。

「……！！」

声にならない叫びを上げる明日香だが、大輔は気にしない。

「ほら、ごくくんしろっての。そうすれば苦しくないだろ」

「んぐ……んぐ……ごく……ごく……ふはあ……」

背に腹は代えられず、大輔の精子を唾液でごくごくっと飲み下す。青臭さ、どろっとした粘り気のある精子だけれど、喉をぬるりと落ちていく。

「ぐう……げへっべっべ……もう……」

抗議に視線を送るも逆らえるはずもない。やはり昭利を止めるのではなかった。こいつは一回ぶっ飛ばされるべき。そう思った。

「ふう……すっきりしたし、明日香ちゃんに戻つてろよ。それとも一緒に戻るか？」

「ふざけないで……バカ……」

せめてもの反撃をしつつ、明日香は屋上から戻る。

これ以上ここに居たらチンポがまた鎌首を持ち上げかねない。先生に比べて性欲が強い大輔のことだから、今度はセックスさせろと言いだしかねない。そうなれば撮影に影響がでてしまう。

彼の機嫌が変わらない内に足早に階段を下り、水場へと走る。途中、誰かが居たような気がしたけれど、そんなことは気にしていられない。というか、誰かに見られるわけにはいかない……。

十

「精子臭いな……。セックスしてたのかい？」

扉が開くと同時に男は顔を顰めてそう告げた。縄で固定されていたドアだが、それを指南したのも彼であり、内側からの外し方も知っている。

「まさか……。さすがにできませんよ。先生の恋人でしょ、明日香は……」

階段を降りる明日香を見計らい、上がって来たのは隆だった。彼は射精をして腰砕けになっていた大輔に日常会話のように話しかけてきた。

「可愛いオナホだよ。性欲処理。ま、世の中にはオナホに名前を付けて恋人にする人も居るらしいからあながちまちがじゃないかもね」

「へー、そうなんすか……」

「それより、あまり中村君を挑発しないほうがいいんじゃないか？ 水着の件、モニターになるのは本来彼だったみたいだし」

「そうなんすか？」

「ああ。本来なら君の代わりに三組からは吉岡君、中村君の予定だったからね。先生、勝手に書き換えたけど、もし君が暴れていたら、それも白紙になっていたかもしれないだよ。このことはしっかりと反省したまえ」

「はい……気を付けます」

心にもない反省の言葉を並べる大輔だが、それは隆もお見通し。

二人は穴兄弟なのだが、発覚した時のダメージは意外にも大輔のほうが大きくなる。正しくは大輔の父。地元でも固い職業についている彼の父は、もし息子が強姦事件を起こしたとなれば職を失う可能性が高い。余所の土地に移れば済むという立場にあらず、結果破滅だけが残る。

対し、隆の方は互いに愛し合っていたことを主張できる。年の差のせいでノーダメージと

はいかないが、失うものは大輔に比べれば少ない。

「ま、とにかく明日香ちゃんで遊ぶのは良いけど、あんまりやり過ぎるなよ。いくらセックス好きでも、我慢の限界ってのはあるからな」

「はい……」

逆を言えばそれまでに明日香を誑し込めれば良い。その時は隆こそ一方的に訴えられる立場になる。大輔はそんな気持ちも隠しつつ、殊勝に頷いた。それはいつもの反省していない反省のポーズとして隆にうつると込みで考えて……。

「さて、それじゃ戻ろうか。いつまでも自習にしておけないし……。いや、緒方君はサボるといい。精子の匂いがするよ」

ふっと鼻を鳴らすと隆は屋上から戻る。

「……けっ、教師ぶりやがって……、この性犯罪者が……」

階段を降りる音を聞きながら小声でぼそりと呟く。担任からどうどうさぼるよう言われたが、屋上の風の中時間を潰すのは苦痛の他無い。一発抜いたものの、いらいらでチンポまでイライラし始め、また抜きたくなってくる。

「くそ、何が我慢の限界だよ。明日香はもう俺のもんだ。隆にも昭利にも渡さねえかな……」

苛立ち混じりに吐き捨てると、今日の撮影の後も明日香を呼び出そうと決心した。

翌土曜日の午後、隣街の業者が新デザインの水着の納入にやってくる。撮影に伴い、一足早くプール開きが行われ、水着のモニターを引き受けた生徒のみ午後に集められた。更衣室にて着替え始める女子達。恵梨香はめぐみをちらりと見るも彼女は意に返さず、割り当てられた水着を手にする。

「おい、ちょっといいかしら？　なんか番号が違うのが混じってるらしいの！」  
そこへ綾子が慌てた様子でやって来る。これにはさすがにめぐみも手を止めていた。

「えと、斎藤さんと松島さん、サイズが二人とも逆っぽいの。松島さんは年下だからサイズ小さいのが来ちゃったんだって。だから、二人の交感してほしいの」

「ふーん、ま、この水着じゃうちに小さいもんね。ここと、ここが……」  
厭味ったらしく胸元とおしりを示すめぐみに恵梨香は真っ赤になり、今にも爆発しそうだ。

「ふん……なんとでも言いなさい。はい、松島さんはこっち」

「まだ着てないでしょうね。うち、他人が着た水着なんて着るの嫌だし」

「……」

むっとしつつ手渡す恵梨香。めぐみから受け取ると、確かに胸元とおしりの辺りが小さく感じた。



「ふんふん……」

モニターに選ばれたことと、無料で新しいデザインの水着がもらえることに上機嫌のめぐみは女子のみということもあり、あけっぴろげに裸になる。

ピンク色のブラを外すと恵梨香よりおおきなおっぱいがぼろんとこぼれる。それは無言で彼女にプレッシャーを与えるに十分であり、自然と胸元を隠すようになっていた。

めぐみはそんな年ばかり上の先輩を見下すように、自信満々でパンティを下ろす。

既に陰毛も揃い始め、お尻も丸みを帯びている。同級生どころか先輩、その他教員たちからも性的な視線を受けることがある彼女は、それすら自信の源に還元していた。

「……？」

ぴちっと身体を締め付ける感じの水着に着替え、真デザインの胸元のファスナーを開ける。するとおっぱいへの締め付けが弱くなる。

「ん……と」

伸びやすい布地はおっぱいを包んでくれるけれど、どうもおかしい。乳首が目立ってしやうがない。普通ならしっかりと乳首を隠す布地が裏あてされているはず。

不思議に首を傾げるめぐみだが、他の女子はさっさと出て行ってしまい、一人もたつくわけにもいかず、それを追う。

とりあえず今日はこのまま着て、授業までに母に頼んで布地を裏あてしてもらおう。そうでないと同級生のガキどもに自慢のおっぱいの形だけでなく乳首まで見せてしまう。そんな恥ずかしいことはまっぴらごめんだと……。

放課後、撮影にあたって着替える男子数名。

二組の常盤佑樹、三組からは大輔のみだった。

男子の水着はそれほど変更が無く、モニターは背の低い子と高い子の二人だけ。それに比べると女子は複数名参加していた。

その中には中倉綾子のように大きいけれど他に比べればまだまだな子も居た。色々な体型の子の着用を撮影するのが目的なのだと言われる。

女子は複数人居るので木工室が更衣室として利用されるのに比べ、男子は廊下。荷物はイタズラ帽子の為にロッカーを貸し出されたが、二人で一つ。不遇だった。

「くそ、なんで廊下で着替えなんだよ……」

「仕方ないよ。二人だし」

文句たらたら大輔と、乱暴な彼におっかなびっくりな佑樹。チビでデブ、陰気な彼相手では暇でも世間話すら気にならない。

「おい、閉めとけよ」

大輔は一足先に着替えを終わらせるとロッカーに荷物を入れるとプールへと向かう。

「……くそ、少しばっかり金持ちだからっていい気になりやがって……」

聞こえないところでようやく愚痴をこぼす佑樹。ムカつきを抑えられず、何かイタズラしてやろうと大輔の荷物を見る。

「……?」

ふと匂いがした。精子の臭いだ。

大輔ぐらいなら精通していたり、オナニーしていてもおかしくない。ただ、夢精で汚れたまま学校に来るかと言えばそれはありえない。

少し迷った後、荷物に手を伸ばす。そしてブリーフを見ると、ぬるっとした精子が着いていた。学校でオナニーしていたのだろうか？ だとしたらその内に大輔の自慰現場を見つけて何か証拠を掴むのも良い。綾子なら何か上手い作戦を考えるかもしれないと、ひとまず荷物を戻す。

「……?」

ふと音がした。木工室の方に人影があった。それはすぐ近くのトイレに入ってしまったようで、小さく扉が閉まる音がした。きっと気付かれないように手を添えて閉めたのだろう。

今日、女子が木工室で着替えをすることは周知の事。覗きだろうか？ 既に覗いて印象を忘れない内にオナニーをするつもりなのかもしれない。そう思うと少し羨ましかった。

「さてと……」

ロッカーに荷物を隠すと鍵をかけ、佑樹もプールへと向かった……。

更衣室が無人になったのを見計らい、下に設置されている通気口に手をかける者がいた。

「よいしょっと……」

笠原雄太だった。彼は綾子に命じられ、今の時間までトイレに隠れていた。女子が居なくなったら侵入し、松島めぐみの下着でオナニーをしろと言われた。

自分の精子を女子への嫌がらせの道具にされるのは悔しいが、女子の下着を手にしてのオナニーに興味があり、また、綾子が安全を保障してくれるのであればむしろ自分から頭を下げてお願いしたい。

今日の為に明日香を妄想しての自慰も控えており、チンポはギンギンに固くなっている。

「へへ、んで、めぐみちゃんのはどれかな……つと、お、これかな？」

適当な鞆に手をかけ、中身を探る。遠目ながら生意気そうな性格だと理解しており、持ち物、特に鞆に名前を書くようなださいことはしないと踏んでいた。だから遠慮なく中身を探る。後輩ということもあり教科書が違うのですぐにわかる。念のため、名前を確認すると、教科書にはフルネームで松島めぐみとあった。

「よし、これだな……っていうか、ブラジャーしてんだな……。後輩のクセに生意気だぜ」

ブラジャーどころか背丈も自分より高く、不愉快極まるものだった。だが、それ以上に下着を前にして性的な興奮がむくむくと盛り上がる。

あの大きなおっぱいと丸みを帯びたお尻。それとぴたっつくっついていてそれが今日の前にある。

そうでなくても周りには女子の下着、衣服が置かれており、甘いふんわりした臭いが漂っているのだ。

もし綾子の命令でなければ、このまま全員の下着を盗んでしまいたい。そうすればしばらく自慰のネタに事欠かない。だが、ここで綾子に逆らうことのメリットが無い。下着も魅力的だが、やはり生身の女子の裸を見られる方がいいし、触りたい。また女子にエッチなことをできるのであればと、我慢することにした。

「さてと、これかあ……」

めぐみの下着を手に取り、ふんふんと臭いを嗅ぐ。甘い臭いに汗のおいがする。いくらおしゃれな下着をしているとはいえ、いくつも買ってもらえないらしく、よく見るとくたびれている。それだけに臭いも沈着しているのだろう。それが返って雄太を刺激した。

「やべえな……すげえ良い匂い……なんだよこれ……」

思わずズボンを脱ぐと、皮を被ったチンポは既に勃起しており、先端からたらっと我慢汁を垂らしていた。

「くそ……めぐみの奴め……、エロイ下着しやがって、それにおっぱいもでかいし、生意気なんだよ……」

ブラジャーを口、鼻に当て、すーはーと息をする。途端に刺激でくらくらとしてしまう。同時にチンポからどろっと粘液が零れ、床に垂れる。

「ああ、めぐみ……めぐみ……」

ちらりと見た背格好を思い出し、チンポを抜く。我慢を重ねたこともあり、快感はすぐに沸き起こり、むずむずする気持ちと、浮かぶような感覚に悶える。

「めぐみちゃんのおっぱいを包んだのか、この布……すげーなあ、でけーし……良い匂いだし……」

すびすびと鼻を鳴らしながらブラジャーに口をつける。まるで食べるかのように口にはみ、チンポを前後に扱っていた。

「うう……ああ、キモチイイよ、めぐみちゃん……」

妄想の中で嫌がるめぐみにチンポをこすりつけ、たまに緩急をつけて射精しまいと堪える。「やべ……、下着汚せて言われてたんだっけ……」

思わず出しそうになったところで一旦我に返る。今度はパンティに手をかけると、少し黄色くなったクロッチ部分に顔を近づける。さすがに直に顔をつける気にはなれず、おそろおそろ臭いを嗅ぐ。

やはりおしっこ臭い。思ったようなフローラルな香りではない。けれど、チンポがはぐんと強張る。

「はあ……やべえ、めぐみちゃんのパンツ、くせーな……。なんかクセになるよ、このくささ……ふぬう……」

だんだん興奮しだした雄太はいつの間にか舌を伸ばし、黄色い染みに触れようとしていた。頭では汚いと思っていて、鼻も臭いと告げているのに……。

舌が伸び、クロッチの染みにちろっと触れ、それを皮切りにべろんと舐める。

「んう……しよっぱ……臭いしよっぱいや。めぐみちゃんのはんつ、なめちやったよ……」

「はあはあ……くう、はあはあ……」

「はあはあ……くう、はあはあ……」

またも一舐めすると背筋からぞくぞくつと震えが起きる。激しく呼吸することだんだんふらふらしてくる。過呼吸のような症状が出て足元がふらついてしまう。さらにチンポを抜くことでの快感で腰くだけになり、がくんとしゃがみ込む。同時にチンポを強く刺激してしまったせいで、我慢が限界にきてしまう。

「わ……ああ、ああん……」

裏声を出して喘ぐ雄太は舐めていたパンティをチンポにあてがい、おもうさま射精する。びゅう……びゅっびゅっびゅっ……！　びゅびゅ！　びゅっ……。

パンティでチンポを包み、射精しつつチンポを弄る。手でするより布で擦れるけれど、興奮がそれを上回る。

「あ、あう……うあ……ああ……」

情けない声を上げながらかくんかくんと律動する。

ほんのり湿った程度の布がじわっと湿り気を強め、甘い香りの中に青臭さが漂い始める。

「くう……はあ……すげーキモチイイ……クセになりそう……」

やや黄ばんだ精子がたっぷり塗られたためぐみのパンティを見て、溜めていた分沢山出たと満足気な様子。快感もいつになく激しく、身体に疲労感が漂う。

「うう……どうしよう……くそ……なんでパンティ沢山あるのに、俺にはオナニーする気がねーんだよ……」

周囲には他の女子のパンティがいくつもある。今は出したばかりですがすぐという気持ちは起こらないが、数十分でタイムリミットになることがわかつている。

オナニーはしたいけれど、その場面は抑えられるわけにいかない。なくなく雄太は部屋を出ようとする。

「……」

通気口を前に手近にあるパンティを見る。誰のだろう。だれでもいい。身体付きの良い女子のに決まっているのだ。雄太は手近にあったパンティとブラジャーを握り絞めると、通気口をくぐり、逃げる。

綾子に言われた通りにしただけ……のつもりが誰かの下着を盗んでしまった。もしばれたらどうしよう。二重の意味で怯えつつ、とにかくその場から去ることにした……。

新デザインのお披露目とサンプル写真撮影が終わり、更衣室へと戻る女子達。

「ふう……あーつかれた……」

一際背が高く、スタイリッシュな佐々木百合子はため息交じりに一人先を歩く。彼女は鬼瓦スイミングスクールに通っており、夏休みに大会を控えている。普段は土曜の午後となるとバスにて隣町のスクールで練習をしている予定。今日は特別に新デザインの水着をもらえるということで参加したわけだ。

「お疲れ様。百合子はこれから練習行くの？」

同じスクールに通っている綾子が声をかけると、少し考えた後で首を振る。

「いい。今日は疲れたしパス」

「ふうん、それじゃああたしもパスしよっかな」

「……」

大会参加常連である百合子と未だ水泳4級と3級を歩き来する綾子。練習には時折来たと思うと、しばらくばしやばしやと水遊びをして見学をしている。当人いわく前の学校ではプールが無くて練習することができなかったからなれる為らしい。

普通の運動神経があれば半月程度で25メートル程度、もう半月で複数の泳法を覚えられるものだが、当人にやる気が無いのだから進歩が無い。

半ばひやかして来ている綾子がさもスイミングスクールの生徒と名乗るのが気に食わなかった。

「少しは真面目に練習したら？　いくら都会のがっこで練習してなかったからって、後輩の子だってあんたより泳げるよ？」

「あー、ひどいなー、百合子。そんなこと言うんだ……。ショック」

「だって、せっかくスイミングスクールに通ってるのに練習しないんだもの。こっちは真面目にやってるんだし、たまにいらってするんだよね」

「ひーん、ねえ、聞いてよー真奈く、百合子ってば酷いんだよ？　あたしがカナヅチなのをバカにしてー」

バカにしているのはカナヅチだからではなく、やる気の無いことについて。こういう話の逸らし方も癪に障る。いわゆる都会っ子ならではの意趣返しなのだろうか？

「ふん」

正直相手にしてられないと、足早に更衣室へと向かった……。

更衣室の戸を開けると、むっとした臭いがした。秋、イチヨウ並木で感じることもある臭い。お世辞にも良いとは言えず、眉を顰める。

「なにこの臭い……」

数人の衣服があるからその臭い……とは思いたくない。女子数名程度の下着が数十分放置

されただけで異臭が起きるはずはないと信じた。

「……」

ひとまず自分の荷物を確認すると、特に変わったこともない。なんとなくこの場に居たくない気がしたのでさっさと着替えることにする。

スイミングスクールに通う彼女は着替えるのも早い。さっさと脱ぐと、さっさと着こみ、他の子達がおしゃべりしている中、一人更衣室を出る……とところでふと気づく。

見覚えの無い子は後輩の子だろう。学年下で自分ぐらいスタイルが良いことに驚く。水着でのモニター中、彼女はやたらと胸元を庇っているのが見えた。写真撮影の時も腕で隠し、その都度綾子が指摘していた。その彼女は今、下着を前に固まっている。どうかしたのだろうか？

その一方で恵梨香が水着を脱げずに格闘している。そして、何度も荷物の下や周りを探っていた。

「恵梨香、どうかしたの？」

「えと、それが……そのはんかち、が無くて……おかしいですわ。ここにあったはずなのに……」

「ハンカチが無い？ 別にそんなの……」

「ええ、そうなんですけれど、もらいもので……」

どこか歯切れ悪い恵梨香に訝りつつ、気になったので探すのを手伝うことにする。机の一つ一つ、中を探り、椅子の下もしっかり見る。

「誰かの荷物に紛れたのかしら……ねえ、ちよっとみんなの荷物、見せてもらえる？」

「どうかしたの？」

三組の佐原みなみと沢森明日香がこちらを見る。彼女らは荷物を逆さにすると、何も無い事をアピールして着替え始める。

「変ね。ちゃんと鍵は閉めたはずよね？」

「ええ、最期はちゃんと鍵を閉めて……」

恵梨香は「瞬言葉に詰まった後、綾子を見る。すると綾子も不機嫌そうな顔で見返してくる。

「ハンカチが無くなったの？ それって変ね……」

綾子は恵梨香の荷物の置かれていた場所に行き、しばし周囲を見る。床を見て、さらに通気口を見る。鍵を見て少し頷いた後ため息をついた。

「斎藤さん、しょうがないわ。ハンカチならあたしのを貸してあげるから、今日はそれで我慢してね」

「え、ええ……ありがと」

綾子から差し出されたハンカチを手に、恵梨香は困ったような顔で頷く。

「私、ちよっとトイレに行ってくるから……中倉さん、ハンカチ、ありがとうね」

「どういたしまして……」

不機嫌そうな綾子はいつになく素早く着替えを終えると、まだ着替えの終わっていない女子が居るにもかかわらず、ドアを開けっぱなしで帰って行った。

「ちょっと綾子……ったく、我儘なんだから……」

百合子は慌てて戸を閉める。土曜の午後、特に誰かが残っていることも無いだろうけれど、こういうのは気持ちの問題。機会があったらきっちり告げる必要がある。都会ではそれで通用するのも可成りないが、田舎者と舐めないでほしいと。

「……」

背後では後輩の子が難しい顔で水着を脱いでいた。彼女は下着を着けずにそのまま服を着ているように思えたが、気のせいだろうか？ どうも胸元に乳首らしき膨らみが見える気がする。

「なんか変ね……」

土曜の午後、たかが数十分の間で蔓延る不審。百合子は眉を顰めて更衣室を出た……。

更衣室を出て帰路に着くめぐみ。今日は午前中だけということもあり、最近のファッション雑誌の表紙に載っていたミニスカートを穿いていた。それがあだとなり、歩みが遅い。普段ならスパッツ穿いて大股開きで帰るのに、今日はそれができない。というのは汚された下着のせい。

穿き古したパンティのクロッチ部分にねっとり塗られたやや黄色いゼリーのような粘液。青臭さを醸すその正体をめぐみは理解している。精子だ。

プールで遊んでいる間に誰かが更衣室に忍び込んで自分のパンティでオナニーをした。なぜ自分が対象になったのかはわからないが、結果がそこにある。

もともと発育が良く、クラスメートや教員から性的な視線にさらされることのあるめぐみは、その程度誇らしくすらあった。だが、ここまでのはっきりと性的な悪戯をされたのは初めてであり、嫌悪感から吐き気がする。

帰り道、鬼瓦公園に立ち寄り、ベンチに座る。

一体だれがこんなことをしたのだろう。わからない。とにかく腹が立つ。それ以上に気持ち悪い。お腹をおさえつつ、スカートをひっぱる。今は穿いていないのだ。

そう思うと急に恥ずかしくなり、身体が熱くなる。プールで冷えた身体が温まろうとする熱と合わせて汗をかき始めていた。すると今度は肌着が肌に張り付く。普段ならブラが透けても気にしないめぐみだが、今は付けていない。服に乳首がぷつと浮かび上がり、乳房の形を隠さない。

「いや……」

今度はおっぱいを隠して前のめりになる。すると、お尻が浮くわけで、そうすると後ろからは……。

かしやりと機械音がした。

「なに？ 今の音」

「ごきげんよう、松島さん」

知らない女子が居た。いや、先ほど会った。新デザインの水着のモニターと一緒に居た女子だ。自分より胸も小さい女で、どうしてモニターに選ばれたのか不思議だった。

その女子はペンを胸元にしまうと、今時古臭い折り畳みの携帯電話を取り出す。

「なに、それ？ あんた……まさか……」

「ふふ……これね、電話とかメールできないけど、こうやってカメラの代わりになるのよ」

そういつてめぐみに向け、シャッターを切る。

「ちよっとやめなさいよ！ 勝手に写真撮らないで！」

立ち上がり、慌ててスカートを抑えるめぐみ。あやこは意に返す様子も無く、携帯の画面を見せる。

「あれあれ、どうして松島さん、パンツ穿いてないのかしら？ 汚いしわっしわの穴が

見えてるわ。はずかしい……くすくす……」

綾子は盗み撮りしていた写真を見せつける。

「な、あんた！ なにしてんのよ！」

咄嗟に手を出して奪おうとするが、相手もそれを見越してさっと身をひるがえす。背丈こそめぐみの方が高いけれど、逃げられては届かない。

「うふふ、いいの？ パンツ穿いてないんじゃない？ 見られちゃうわよ」

「あ……！ くそ……あんたね、うちのパンツに変なことしたの……」

言われて思い出し、慌ててスカートを抑えるめぐみ。

「あら？ なんのことだか知らないわねえ」

「くう……と、とにかく、その写真、消さないよ！ うちのお尻盗撮して……許さないんだから……」

「ふふ……だつてねえ、松島さんたら生意気で、この前も私の体操着に泥水かけておいて謝らないんだもの？ 少しお仕置が必要だと思つてね」

「な、それなら謝るから、早く消さないよ！」

「それが謝る態度かしら？ ちゃんと手を付いて謝らないと」

「体操着汚したなんてしらないもん。うちじゃないし」

「貴女の投げたボールが水たまりで跳ねたのよ。貴女のせいだわ」

「そんなの事故じゃない……」

「とにかく謝りなさいよ。手を付いて、ちゃんと……」

「……いや！ そんなの事故じゃん。あんたのは犯罪！ とにかく返せ！」

「くすくす……あらあら、乱暴ねえ……あ……ちよつと……もう……」

体格で勝っていることもあり、めぐみは力づくで綾子に掴みかかる。どうせ周りに盗み見る者はいない。恥をかなぐり捨て、お尻まるだしで手を伸ばし、無理やり携帯を奪う。

「これさえなければ！」

「いくら古いといつても値段するのよ。返さないよ」

「うるさい！ 人のお尻盗み撮りしといて言うことか！ これは消させてもらうから！」

携帯を弄り、写真を削除しようとする悪戦苦闘するめぐみ。旧式の携帯の操作はよくわからず、何度も同じ画面を行き来していたが、削除というポップアップが出たのでほんと胸をなで下ろす。

「ふん、何が謝れよ！ この卑怯者！ 残念だけど写真はこの通り消させてもらったからね！」

「あらあら……残念ね……」

携帯を投げ返し、捨て台詞を言うと思返す。一連の出来事はすべてこの女の仕業。今回のことはもうどうにもできないが、今後、この女子が居る時に気を付ければ良い。ついでにこうやって体格差で圧倒すればどうにかなることも示せた。十分に綾子を圧倒したことにい

い気になり、めぐみは下着を穿いてないにもかかわらず悠々と公園を出た。

「ふふふ……乱暴な子ね。今謝ったら許してあげようと思ったのに……。さらなるお仕置  
きが必要かしら？ 今度は塗り薬じゃなく、にがあい飲み薬になるかもしれないけど……」

綾子は衣服をばたばたと叩いて砂埃を払う。ペンを取り出すと突起を押す。するとかろうじて光る赤ランプが消えた……。